

土 淨

昭和十年五月二日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別費承認雑誌) 第三二五号
昭和五十年六月二十五日印刷 昭和五十年七月一日発行
第四十一卷 第七号



S. Kuz

1975

7

樂生

大光院靈海



樂生

鈴木靈海

(群馬県太田市大光院住職)

樂生と書いて、読み方は色々に出来ると思う。ギョウシヨウと読めば、至心信樂欲生我國となろうし、ラクシテイキルと読めば、無為徒食のグータラ生活になりかねない。試みに辞典を引くと、列子にある語で、ラクセイと読んで、此の世に在るを喜ぶの意であるとしているが、現在私の主宰する樂生会では、ラクシヨウと呼んでいる。

樂生会は昭和二年の創立で、その名の謂われについて、曾って先代鈴木靈真に教えを乞うた所、ギョウシヨウの意も勿論あるが、今生を楽しく生きるために、此土極樂の建設を目指して、信仰活動と社会活動に力を入れるのだと力説された。

思えば誠に遠大な理想をこめた会名であるが、役員八十名、会員九百名、楽しく生きるとは、人と共に楽しむことであると心得て、奉仕活動を続けている。

七 月 号



目 次

楽 生	鈴木 靈 海
おぼんの話	佐 藤 良 智…(2)
現代人のモラルを考える⑥「恩」	戸 川 靈 俊・石 川 孝 之…(6)
釈教歌集「続々法の衣」に就いて①	石 畠 俊 徳…(13)
ご法語に聞く 法然上人の人と生活⑦	
群居・闘争の誠め	宝 田 正 道…(20)
欧米宗教見聞録⑥ 禅仏教の流行	安 居 香 山…(24)
書の四季④ 俊乗坊重源のこと	林 錦 洞…(29)
心と自然環境	横 山 紘 一…(30)
ハガキでひと言「おぼん」	川村悠穂・高市雲城・塩竈義弘…(32)
ポストの中のパスポート	青 山 香…(36)
念仏ひじり三国志⑫法然上人をめぐる人々	寺 内 大 吉…(38)

表紙 久住静雄画

カフト 大正大学美術部



おぼんの話

佐藤良智

(大正大学名誉教授)

おぼんとお正月ということばは日本人にとってもっともなつかしいことはです。盆と正月が一度にきたようなど最も庶民的なものとなっている。日本は四季がハッキリと区別され、近ごろは、何々の日と言う日が多くなり、四季などはおかまない。

明治、大正ごろまでは、盆と正月という大きな分けかたで二つに分かれ一年をしめくくっていた。実にはっきりしていい。七月の盆と八月の盆とがある。八月の盆は一月遅れなどと今日では言っている。土地によって違っている。旧盆が加って三つにもなってい

る。あまり直載でもない。

○

さて、お盆を前にしてそのことについて調べてみたい。

地方によって独特の行事がかぎりなくある。東京などでは、七月の十三日にお仏壇をきれいに掃除し、八百屋に売っている飾りを買ってきてかざる。お仏壇の三方をかざり、お盆独特の果物が、これもお盆にだけ使われる竹の小さな籠に入れられているものを供える。お茶碗に蓮の葉が入れてあって水がたた

えられ、一方にお米が供えられていて花草で供養する。おせがぎの意味でしょう。

十三日の昼のうちお寺にゆき御先祖様のお墓にお参りして御先祖様のたまを家におつれ申すのです。夕方玄関の前でおがらをたいてお迎えします。この行事も東京の町の中では段々とすたれました。マンションなどではできないことです。しかし、お仏壇は祭られお盆の祭りがたが普段とは異っています。十五日の夕方には御精霊さまがお帰りになるというので、おがらをたいてお送りします。その間に菩提寺から来て御回向をいたします。

これが東京の大体の様式です。これによってもわかりますようにお盆は、御先祖様のお祭りです。近頃は「み魂祭り」などと呼んでいます。御先祖様が大切なことは日本人はよく知っています。お盆の行事は先祖様にちなんで日本のどこでも行われる。棚経の習慣も広く行われている。近頃はお坊さんの人手不足で

行われないところもでてきているが、年に一度の先祖祭りは是非たやしたくないものである。私の小学校の頃、それは明治の末年ですが、修身という科目があつて、何年生であつたか、祖先をとうとべという一章があり、御仏壇に子供が手を合せている絵があつたのがありありと目に浮びます。今は全くそのようなことがない。しかし、祖先を崇ぶということとは血の中に流れています。お盆はそれにびったり結びついています。



仏典によれば、盆とは盂蘭盆の略されたことばです。「さかさまにつるす」という意味です。なくなった先祖さまがさかさまにつるされている苦しみを受けているというわけです。しかも、地獄や餓鬼道です。

うらぼん経というお経にはこんなふうにかれていきます。

仏さまのお弟子に目連（もくれん）というすぐれた方がおられた。目連さまが修行をうまれて六通と言って、六つの神通力を得られた。その通力で、父母の御恩に報いようと亡くなった父母を御覧になると、どうしたことでしょう。罪を重ねられたせいでしょうか、お母さんが餓鬼の中に生れて食べるものも、呑むものもなく、骨と皮になっておられた。目連さまはこれを見て悲しみにつつまれて、お飯を盛って母の所に神通力で往き、さしあげたのですが、お飯が口に入らないうち火山灰となってしまう。目連さまは、大声で泣きさげびかなしみしました。このことを仏さまに申しあげましたところ、み仏さまは申されますに、お前の母は、罪が大変に深く、お前の力ではどうすることもできない。お前の孝順の心がどんなに深くても、たとえ、天地を動かすほどでもどうにもならない。これにはこうすればよいと説かれた。

七月十五日、この日は僧たちが安居（あんご）と言って、四月十五日（或は五月十五日）から九十日間、一所に止って修行し、自分の罪をサングして心身共にきよらかになる日であります（五月の十五日に初れば八月十五日で後の安居と言っています）。このきよらかになった僧が、過去七世の父母、又は現在の父母の厄難のもののため、お飯等を僧に供養するがよいと。そうすると目連さまの悲しみがなくなり、目連さまのお母さんは餓鬼の苦しみをのがれることができたという。また、現在の父母を寿命百年にし無病、また過去七世の父母をして餓鬼の苦しみを離れしめることができる、とも説いてある。

これがお盆の初まつたいわれである。中国では梁の武帝が大同四年に同泰寺というお寺に詣でこの「ウラボン会」を行ったのが初めてであるという。これは西暦五三八年であるから六世紀の初め頃から行われたわけ

それ以来朝野で行われたというから随分古くから行われたわけであります。

わが国では聖武帝の天平五年（西暦七三三）に宮中で行われ、以来年中行事として行われ、天下に命じて盆供を行ったと伝えられている。八世紀の頃から漸次全国的に行われたというからわが国の行事としても大変に古いものと言つてよいと思う。現在に於いても初めにのべたように全国に行われている。

○

なぜこのように古くから行われ今日に至っているかと言へば、父母を大切にし、先祖を重んずるという人間の根源によつたわる尊い血の流れにかかわっているからであると思う。

今日の世相は親子の間でさへなにかひややかなものがながれがちである。親子の間の断絶などということばもあるし、実際にそのよ

うなことを目の前にみることもある。いつの世でも現在とはなげかわしい世であるとなげきがちであるが、現代の世相はすこしたはずれではないでしょうか。

仏教の原理である、すべてのものは縁起である、もぢつもたれつのものであるということがわすれられているのではないのでしょうか。たてにつながり、横につながっているのが真実のもののすがたであります。

家の中のつながり、社会のつながり、国と国のつながりをわすれては人間は生きてはいけない。世界の全縁起が見なおされなければならぬ時にきているのではないのでしょうか。そのような時にお盆の永い永い歴史が私共に深い深い真実のものを教えていることを知らなければならぬのであります。お盆はたてのつながりばかりでなく、お盆の踊り等にみられる横のつながりも大変大切なものであります。

恩



現代のモラルを考えるⅡ

〈第六回〉

戸川 幸俊

(大阪工業大学教授
京都市左京区黒谷西住院住職)

「恩」についての意見を求められて、平常意識にも上らなかったこの言葉であるが、考えをめぐらしてみ

と、この言葉ほど、自分たちの日常生活に密接な関係、影響をもっている言葉は見当らない思いがする。

わたくしたちの生活は、人間と人との間柄の生活であるが、その間柄を一本貫ぬくすじ道、条理というものは、恩の一語に尽きると思う。

敢て大乗本生心地観經の説く父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩の所謂仏教の四恩を持ち出すまでもなく、わたくしたちの人間関係の基底をなすものは「恩」に外ならぬものと思う。

人間お互いが、恩に恵まれ、恩を恵み合う生活こそが、わたくしたちの日常生活であろう。

ところで「恩」の理念は、世界を通じて、時間を超えて厳然として存在するが、そのよそおい、その色彩は、万古不易ではなからう。

道徳とは一面、時代なり民族なりの風俗であると考えられるが、そこに「恩」についても流行不易の面が考えられる。そこに、「現代人のモラルとして」の「恩」が問題とされてくるのである。

「恩」が「恩」として理解されるのは、「恩」が行為化される時である。顕現化される時である。

「恩を知る」「恩に報ゆる」「恩にそむく」「恩を忘れる」ことなどによってわたしたちは「恩」の意味を理解し、認識し、それを基準としての人のあり方の正・不正、善・悪を批判できるのである。

そして一体どのような行為が「恩を知る」ことなのか、又、どのような行為が「恩を売る」ことなのか、その解釈の仕方によって「恩」についての意味が時代のモラルとしてちがった姿であらわれてくるのである。

ある時代には「恩に報ゆる」とされた行為が、ある時代には、そうでないとされるのが、時代の風俗としての「恩」のモラルなのである。

例えば、赤穂義士の行為の如きである。元禄という封建の体制下では、当然の行為として義挙と讃えられても、昭和の現代には到底通用しないであろう。逆にある時代には「背恩」の行為とされたものでも、現代ではそのようには受け取れぬものがある。

「恩」とは、再び云えることは、人と人との間柄の表現である。「恩」は与えるものと、与えられるもの——適切な云い方がないかも知れぬが——との関係を示す言葉であり、与えるものと与えられるものとの関係において成立する底のものである。

与える・与えられる、恵む・恵まれるという言葉の響きは、対等の立場での人間関係というよりも、えてして人間の身分・階級の上下の関係を示し易い。

親の恩、師の恩、主君の恩——これらの言葉の響きの示すように、親の恩、師の恩は、兎に角として、恩顧時代の主君の恩の如きは、永い封建の歴史の間に、真の恩の典型かの如くに薫習されてきて、今も尚、「恩」という言葉を聞くとき、そこばくの重々しさを感じさせられるものがある。

いつの時代でも、「恩」の言葉の発せられるとき、それが「恩を恵む」とされる側から発せられる場合が多い。

恩に背く、恩を忘れる、恩を裏切る、恩を仇で返す——そのように解釈される行為は、わたくしたちの倫理観では、人道に外れて非道徳極まる恥べき行為とされる。特にそのことが、強調して説かれ、意識されたのは、上下の身分区別の明確な封建体制下において敵しい。体制維持のための精神的支柱とされた儒教の恩の思想の影響するところであらうし、それは今日の博徒の世界の親分、子分の系列にもその一端を窺うことのできるものである。

「恩」が恩を恵む側から強調されるとき「恩を恵む」意義は失われて「恩を売る」という意味に低劣化する。

「恩」は売られたとき、「恩」の真のあり方、真の意義は失われてしまうのではなからうか。

恩は売られるべきでない。又、恩は恵まるべきものでもない。

天衣無縫、無心に為された行為が、「恩」として他人に受けとられるか、観られるかは、敢て、行為ある者自身が意識すべきものではなからう。

「恩」とは、むしろ、他人の行為の中に、自分へのそれがれた思慮を見出すとき「恩」は初めて成立するものだと思う。すなわち「恩」とは、他人の行為を「恩」と感じ、他人を「恩人」と感謝する側によってこそ成立するものと思う。

無心、恩無邪に為されたあらゆる行為、それらを謙虚に受けとめて、善意の行為も感謝するところに「恩」とは身分の上下で結ぶ関係ではなしに、あらゆる人倫関係に通じるものであることが理解されよう。

師の恩ばかりでない、弟子の恩もあろう。親の恩ばかりでない、子の恩もあろう。君主の恩ばかりでない、庶民の恩もあろう。友と友との友情の恩もあろう。同朋相

互の恩もあろう。人間相互を堅く結ぶ紐帯それこそ恩と呼べるべきものと思うのである。

知恩、報恩という言葉がある。

「あとを一廟に占むれば遺法あまねからず、念仏の声するところ、海人、漁人が苦屋までもみなわが遺跡なるべし」

と仰せられた宗祖法然上人であるが、勢観坊源智上人は、心の親とたのむ師の恩に報ゆるためとして、師の恩を知る心をこめて営まれたのが祖山知恩院の堂舎であると言われる。

まことに、源智上人の創建された祖山知恩院のたたずまいは、人間の「恩」を知るの意義を教えて、測々として仰ぎ見るものの胸に迫るものがあるが、それにも増して強く教えられるのは、勢観坊源智上人に及ぼされた宗祖法然上人の無償の恩寵ということである。

償いを求めぬ恩寵こそ「恩」の意義を絶するものである。

さらに、法然上人が、四国配流の勅命の折に、それを逆境の恩寵と理解し、進んで辺土の人たちに念仏の勸化の機会を恵まれたことと感謝して、老軀心勇んで流罪と朝恩と頂かれたのは、よく倫理的解釈の及ぶところで

はない。

勢親坊源智上人は、師恩に報い、知るために、あのような象徴を創られた。それは、その時代としての意義があった。さて現代において、わたくしたちが祖恩に報い、知るためには、どのようにすべきであるか。そこに現代人のモラルとしての知恩、報恩の課題があると思う。

現代の学生には師の恩なぞ通じない、親への恩なぞ微塵も感じない——往々にして冷めたい批判を聞く、果して、そうであらうか。

まことに、あのとげとげしい学生と教師という関係での団交という場面なぞを見ると、三尺去って師の影を踏まず式の謙虚な姿は些かも見られないが、と云って、あれが現代の恩師への態度の全てであらうか。



一、ノーマル以外のものでありたい

近年、年配の人々の声として、若い者はあまりに合理

子のある年齢まで育てるのは親の義務、成人した子は親とは別のものと考えて、老人において、核家庭に団欒を求めてゆく若人のあり方が、世の青年一般の真のあり方であらうか。

道徳の表現——「恩」がモラルとして、これまでとはよそおいを異にしての結果が異様に映するのではあるまいか。

ただ考えねばならぬことは、恩とは——師の恩も、親の恩も——師の側から期待する恩、親の側からの要求する恩であってはならないということである。

モラルとしての恩について思うとき、次元を異にするが、典型として教えを受くべきは、常照我の如来の無倦の大悲なり、聖アウグスチヌスの無償の恩寵——聖寵 (gratia data) のことである。

石川孝之

(元京浜女子大学助教授
横浜市港南区正覚寺住職)

的にものを考え、精神面の欠如は著しいという批判があるが、私は、必ずしもそうは考えない。なぜなら、

宗教者としての私の話に熱心に耳を傾けるのはむしろ青年の層が厚いようだし、社会全体に道徳不在といわれるが、書店でベスト・セラーとなるものには、精神面を説くものが多く、その読者層は、同じく青年層が圧倒的である。

このことは、極めてノーマルなことであるが、そのノーマルが現代は多少微妙で複雑である。素晴しい未来を建設しようという覇気ある青年は、大概一種のアブノーマルへの憧れを持っていて、「わたしはだいぶアブノーマルなんです……」と切り出して来るが、聞けばたいして変わったところはないのである。ところが、「青年なら当然のことで、特にアブノーマルなことはいないよ。」と答えればご機嫌が悪い。かと言って「それはクレイジーだ」と言えばなおいけない。「平凡でありたくない」けれども気狂いでは困る。つまり「ノーマル以外のものではない」との願いがノーマルであるという事なのだ。

このことは、平和で安穩な日常生活の中でノルム（標準・規準）を向上建設させようとする青年層に対して、血と汗の中で充分知り得た、既に厳然と存在するノルムを持つ年配層が彼等を逸脱した実に許し難い存在としか思えないのも当然な事態（時に断絶と呼ぶ）となってい

る。社会改革、過激派学生とその分裂、新興教団の熱意、爆破事件等々。成程年配の人々の声を声とせざるを得ない実態である。

民主主義の世に生れ育ったものが、目下認知し得ないでいる弱点（幼児は絶対の力を持つキカイダーや巨大な怪獣が各々特有な弱点を持っている事をよく知っている）と言わなければならない。

アブノーマル——それは平凡からの飛躍ではなく、健全からの逃避でしかない。否、ノルムそのものの崩壊のしるしである。ノルムに寄りかかった人間が、自分の基盤とするノルムの崩壊に直面して、更に新しいノルムの建設どころか、それを見つめることに耐え得ずに逃げ込んだ袋小路にすぎない。

二、知育に織り込まれた徳育

学校教育の中の道徳教育の問題は、そろそろ立派な状態に入り、知識として理解する一教科として既定化されたようだ。修身教育はいやな思い出としてふれないように心掛けられ、嫉や道徳はどの教科の中でも織り込んで行くべきだとしたけれども、そんな芸当は出来る筈がない。まして戦争を知らない子供達の代表がぞくぞくと

教壇に立つて戦争を語っているのが現代である。

徳育はコンクリートの中では育たない。仏教でいう一掃除、二動行という実践行は現代のノルムから逸脱した存在である。精一杯の努力だった高校の倫理社会も、東西先哲の紹介に終始し、過ぎ去った事実のスクラップ・ブックに過ぎない。徳育は心で受けとめるものであって、知育の如く頭で、体育の如く体で受けとめるものではない筈だ。勿論教育をこのように分けることすら古いかも知れない。かつて英国のバブリック・スクールの祖、アーノルド博士の提唱以来、百数十年は経過しているからである。しかし我々が現代を経験している徳育不在の状態は、彼の国に於いても既に数十年前に科学偏重のあまりアブノーマル化した事実があるではないか。過日、大本山光明寺に現台下ご入山の祝いに頂戴した「蓮光集」の中にインドの詩聖タゴールの言葉を引用されたものがあるが、民主主義の弱点を暗示するに余りある実に切れ味の良い比喩だった。それは「西洋文化は城壁の中で生れたものだ。東洋の文化は森の中で育ったものだ。城壁の中の文化は相手と対立するものだ。森の中で生れた文化は周囲と調和をする文化である」というものである。

三、見当らない惻隱の心

現代に「恩」という文字は殆んど見当らない。最近「感謝」とか「お蔭様」とか「おもいやり」とかいう言葉でもってごく遠慮勝ちに強調する人がふえてはいる。だが相変らずこれも理論に止って実践は伴わない。知的作用として認識の段階で止っている。その最も根元は人間不信から来ている。わずか昔、素晴らしい情を豊かにらしめるために知があった時代、重そうな荷物を持っている人が前を歩いていけば、十人が十人追いついて手をかしたものである。現代はまづ全く違う。重荷を持つ以上、持つ者がその責任の上に立つてのことと理解する。ある時外国で大きなスーツケースに手をやいている老女に、進んで手を差しのべた事がある。その人は断固ケースをかかえ込んで身構えたものである。実に照れくさくも、情ない事であるが、後日友人は、私への不信感を笑ったのだった。だが考えてみると「チップの社会」である。勿論過去の良き日に育ったお古い私のことである。全く謝礼など期待しての事ではない。だがこんな簡単な親切も、素直に受けとるには実に煩わしい、恩きせがましい、難かしい行為となりはてた。かつて何度も経験した、あの繰返しのお礼の言葉や、無理やりににぎら

せてくれた「お駄賃」なるものの温情と、その後には味わう得も言えぬ快感は、殆んど今の子供達は味わっていない。又、その反対に、手をかすのは当然だという風潮すらある。

さて「恩」であるが、辞典によれば、

一、恩は恵なり。心因に従う。因とは声なり。

二、恩は愛なり。

三、おもいやり、情、即ち「仁」なり。

四、いたむ心、即ち「穩」なり。

五、感謝する心、己の恵を感じる事。

とあるが、全て人なら当然わき起る「止むに止まぬ心」から発る心の中である筈であるが、「恵みの中にあつて、恵みを感じ得ない」のが現代であつて、「衣食足つて礼節は知り得ても」惻隱の心は育たないコンクリート文化化し切つて了つたのかも知れない。孟子のいう仁・義・礼・智の中で、やはり「惻隱の心は仁の端なり」という点が一番弱いようだ。

四、仏教の四恩は理想のノルムである

いわんや、大乘本生心地觀經等という「四恩」は、封建社会のなごりのごとく感ぜられるのかも知れない。父

母の恩は、家族制度の遺物として、核家族の中で育ち難く、まして国王の恩などもつてのほかで、「愛国心」ですら、「民主的な自治能力への十分な自信と誇りとをもつ民族共同体の一員としてのごく自然な感情にほかならない」と倫理の教科書が説明する位だから。人間不信の中で衆生の恩は無く、三宝の恩、実にあやふい。

仏教のいう四恩は、無限の恩であつて、父母の恩は、祖孫の立場で、国王の恩とは、国家共生の、衆生の恩とは、草木に至るまで己がいのちに関わるものと感じ、まことに尊い生命をいただいている実感として、敬虔に三宝をうやまう恩恵に引き込まれずにはいられない筈である。私の寺では十夜法要に限って、古来、卒塔婆の回向文に、「報恩謝徳」と入れているが、この説明を「四恩」を範として繰り返し報いと思つてゐる。

▼会費値上げのお知らせ▲

すでに度々お知らせしていますが、諸般の止むを得ぬ事情から、弊会会員の年会費を左記の如くに値上げさせて頂きました。どうぞ宜しくご協力下さい。

記

新年会員 二〇〇〇円 法然上人讃仰会



釋教『續々法の衣』に就いて
歌集

一附・高昌式部小傳一

〈第一回〉

石 畠 俊 徳

(大津市石山・淨光寺住職)

一 はじめに

法然上人の『一枚起請文』、本文の一字宛を頭に置いて歌を詠み、これを『法の衣』と題しますことは、涌蓮法師を先蹤となし、その後、これに続く人が数代現れています。然もそれは、法然上人の五十年目毎の御遠忌に備えて、宝前に献詠されたもののようであります。

今これを列挙致しますと、

一、『法の衣』涌蓮法師詠

三四二首 宝曆十一年

因に、宝曆十一年は、法然上人五百五十年の遠忌に当るの
であります。

〔註〕涌蓮、名は慧亮、字は達空、伊勢国河芸北黒田の人、真宗高田派淨光寺誓海の弟子。初め江戸桜田澄泉寺に住す。一日高僧伝を読み感発し、一封を留めて寺を逃れ出で、京師に上り、後洛北嵯峨に隠棲し、冷泉為村を問うて和歌を学び、後為村の入道してより、道交甚だ深し。平生一物を著へず、歌書すら一巻もなき簡素の生活なす。念仏誦經の暇には、唯和歌を詠じて楽しむ。安永三年寂。遺稿を集めて『獅子巖和歌集』と云ふ。近世和歌三十六名家の一。

二、『統法の衣』伴蒿蹊詠

三四二首 文化頃

因に、文化八年は、法然上人六百年の遠忌に当るのでありますが、蒿蹊は、これに先立つこと五年、文化三年に没しています。涌蓮の先蹤に習い、これに続く意味で、『統法の衣』と題し、詠じ置かれたものでありましょう。

〔註〕 蒿蹊、名は資芳、号閑田子と云ふ。近江八幡の豪商扇屋庄右衛門第五世なり。享保十八年京都三条高倉の伴弥兵衛資武の第二子として生れ、出でて伯父なる庄右衛門の家を嗣ぐ。少より学を好みて聡明、其本家を襲ぐや、厳格なる家憲を設けて、漸く奢侈に傾き遊惰に流れむとする弊風を一掃し、大に家業麻布蚊帳商を拡張して、更に大阪に支店を開く等、面目を新にす。子なければ養嗣子を迎へて之に家督を譲り、身は京師大仏の辺に卜居して、文章和歌を以て一時に鳴る。

和歌は初め有賀長伯に就き、後武者小路実岳の門に入り、其没後は独り古学を研究し、遂に一家を成す。兼ねて漢学を善くし、又仏教の教理を究む。薙髪して操山と称す。同郷の学僧にして、晩年真葛原に閑居せし六如とは方外の交を結べり。貴顕に寵せられ、特に妙法院宮の殊遇を受く。文化三年没、年七十四。著書何れも行は

れ、就中『近世畸人伝』名高し。家集を『閑田詠草』と云ふ。贈従四位。近三世十六名家の一。

三、『統法の衣』高島式部詠

三四〇首 万延二年

因に、万延二年は、法然上人六百五十年の遠忌に当るのであります。涌蓮の先蹤『法の衣』を偲び、蒿蹊の『統法の衣』に続くという意で、『統法の衣』と題したものであります。式部の伝記は後に述べます。

四、『統後のりのえ』公阿等詠

三四一首 文久二年

公阿等とありますから、公阿他数人の同願同行の人達が集って、式部と時を同じうして、法然上人六百五十年遠忌に因んで、蒿蹊の後に続く意で『統後のりのえ』と題したものであります。公阿は如何なる人か未詳。

五、『統法のえ』諦道詠 明治四十四年

諦道の事歴も未詳。明治四十四年は法然上人七百年遠忌の正当ですが、諦道も矢張り、涌蓮、蒿蹊の先蹤を慕ってなされたのであります。唯式部と同じ『統法の衣』となつたのは式部のに気付かなかったのでしょうか。

さて、今回本誌上をかりて、御紹介申し上げますのは、幕末から明治初年にかけて、太田垣蓮月と並び称されました、平

安の女流歌人高畠式部の釈教歌集、前記第三の『続々法の衣』に就いてであります。幸なことに、その式部自筆の稿本が現在、愛知県西尾市の岩瀬文庫に所蔵されて居るのは有難いことです。

岩瀬文庫

六百五十年に備へまつる

続々法の衣

高畠式部

七十七姫刀美子



続々法の衣表紙

然しこの稿本も、三河安城にお住居の歌人『沃野』の同人築瀬一雄氏が、博搜周到なるお心尽しの結果、先年『高畠式部全歌集』を刊行され、その中に収録されますまでは、全く世に知られることもなくて、未刊のままに埋もれていたのがあります。

その稿本は、半紙半袋綴の一冊本で、本文墨付十七丁、一丁の片面に十首宛を記し、その他に表紙と裏表紙とがあり、表紙には

「六百五十年に備へまつる」

続々法の衣

高畠式部 七十七姫刀美子

とあり、裏表紙には、

「万延辛酉初春日詠」

とあります。万延辛酉初春とは即ち万延二年正月のことです。時恰も、法然上人六百五十年の遠忌に相当するのであります。その遠忌に備へて献詠すべく吟詠されたのが、この釈教歌集『続々法の衣』であるということになります。

二 本 文

附式部小伝

さて愈々本文ですが、釈教歌三百四十首を一気に掲載して頂くのも如何かと存じますので、一枚起請文の文意に随つて、一応六節に分け、それに毎節式部の小伝を附し、その人柄をも併せて偲んで頂くことに致しました。

尚稿本には、式部自ら添削調吟し、歌句の訂正されている点がしばしばありますので、その場合は、歌意の読み取り易い方に従い、又仮名を漢字に置き換へ等も一部致しました。

一枚起請文の本文は、式部は何れによったのか判りませんが、ここでは黒谷金戒光明寺に伝わりますものを忠実に写しました。

第 一 節

もろこし我かてうに、もろもろの智者達のさたし申さるる観念の念にも非ず。又学文をして念の心を悟りて申念仏にも非ず。

続々法の衣

式部七十七編

高島刀美子詠

- 一 も 諸共もろともに何はともあれ終いの道
弥陀の御影を今は恋ひつつ
- 二 ろ 論も義も知らぬ仏の名を呼びて
行けば到るぞ法の都に
- 三 こ この假で助かる法にあひながら
六つのちまたに迷ひぬるかな
- 四 し 知るや如何に人の命は泡沫の
あわより脆く消ゆる習ひを
- 五 わ 忘れぬうき身忘れよ忘ること
法の姿をうるにやあるらん
- 六 か 彼の岸に到る誓ひの舟の綱
南無阿弥陀仏に縋りつつ行け
- 七 て 照り渡る弥陀の誓の遍まはきに
漏るる人こそ哀れなりけり
- 八 う 浮草のさそふ水ある時にこそ
彼の岸近く頼みよるなれ
- 九 に 西の雲はれて浄土に向ふ身と
楽しく願へ法の御影を
- 一〇 も もとの道行衛も知らぬ憂身をば
其假弥陀にひかれ行くべし
- 一一 ろ 六道に迷ふこそ憂き九つの

- その品じなの道もある世に
- 一二 も 求めつつ何をかするぞ真心に
唯弥陀仏と言ふぞよろしき
- 一三 ろ 老少の不定を耳のよそにせず
今爰にあるものこそ知れ
- 一四 の のこさじの弥陀の誓の遍きを
受けぬ衆生はあらじとぞ思ふ
- 一五 ち 散る時も薫る蓮の花みても
いさぎよく行け終の一とき
- 一六 し 静かなる深山の水に心澄め
よしや火宅に住む身なりとも
- 一七 や 闇の夜に迷ひ入る身を哀れみて
遠くも照らせ南無阿弥陀仏
- 一八 た 唯頼め南無阿弥陀仏の内に
はるけき影の影うつります
- 一九 ち ちよろづの道に迷はず一筋に
弥陀の御影を慕ひ行くべし
- 二〇 の 野に遊ぶ牛のうの字も知らぬ身も
南無阿弥陀仏の綱に曳かれよ
- 二一 さ さし櫛の曉ごとに思ふこと
うき世の夢はいつかさむらん
- 二二 た たのみある仏の御手に掛け置ん
ついの終の心ほふ糸
- 二三 し 敷き妙の枕ながらに称へても
此夜ながらの極楽にこそ
- 二四 ま 松の千代竹の万代ちぎりても
つゆ散らぬ間のえにし也けり
- 二五 う 現とも夢ともわかで世中の
雲に迷ひて過ぐる身ぞ憂き
- 二六 さ 更科や姨捨山の月みても
猶たのまるる法の輪の影
- 二七 る 瑠璃の池清き蓮の露ばかり
危うげもなく潔く行け
- 二八 る 類分かつ皆よりよりの親も子も
ひとつ蓮にのりの友どち
- 二九 く 朽室のやる瀬なき身を三ツ瀬川
御法の舟はやすく渡せり
- 三〇 わ 鷺の山高く照らせる月影も
仰ぎて登れ法の台に
- 三一 む 六ツの道三ツの界を通れ出で
弥陀の光りの影にゆく身ぞ
- 三二 ね 眠る間も仏を頼む心こそ

やがて浮世の夢もさめけれ

三三　む　紫の雲のゆかりの藤の花

それだに見れば楽しかりけり

三四　の　後の世を願ふ夕べに響くなり

遠山寺の入相の鐘

三五　ね　ねじけたる人をも法の柔らげて

安くひくこそりの法なれ

三六　む　むす苦の下行く水の音もなく

ひとり独りに行く道ぞよし

三七　に　西の空はるかに見ゆる雨雲の

やがて袂に降りやきつらん

三八　も　物毎の思はるる時猶たのため

法に説くてふ誓ひなりけり

三九　あ　有難き仏の御代に生れあひて

願へば救ふ法にあふ身ぞ

四〇　ら　らくは唯仏の慈悲の御心に

まかせてくらす身こそ極楽

四一　す　姿よしやかへずその仮その心

まことに頼めいのちの道へ

四二　ま　まことより出る一言一声は

仏のどけく天に響かむ

四三　た　高砂の松の千年のよはひをも

法にもれては行かれざりけり

四四　か　かすむ空みどりの海も御仏の

法の光りの到らぬはあらじ

四五　く　くらきより暗き行衛の闇なれば

今より頼め法のともし火

四六　も　物もなく親子同胞なき身こそなほ

慕ひ行く極楽の道

四七　む　無智愚痴に迷ふ此身を其俤に

さとす仏の慈悲な忘れそ

四八　を　愚かにも夢疑ふな人毎に

願へば御手に曳かれ行く身ぞ

四九　し　敷き妙の床の浦浪よるとなく

昼も心に称へ弥陀仏

五〇　て　手をとりて詣る暇なき賤の身も

心にかけて数珠の玉の緒

五一　ね　根なし草浮世の水に浮かびけり

さそはれて行く法の彼の岸

五二　む　軀むくろふに閉ぢ果てて住む露の身も

心たのしく称ふ弥陀仏

五三　の　後の世を願ひし居れば聴て皆

此の世からこそ助かりにけれ
五四 こ 来ひといふ声はなけれど末終に
行くにたがはぬ身をや頼まん
五五 こ こし方も行末も猶しら雲の
迷ひ迷ひて晴れぬうき身や
五六 ろ 櫓も權もいらぬ弘誓の大みふね
仏の御手にひかれてぞ行く
五七 を 怠りを如何に仏に詫び告げん
今日もけふもと人相の鐘
五八 さ 五月闇暫は晴れん我が愚痴の
暗きを照らせ哀れ御ほとけ
五九 と ともすれば怠りやせん花にふれ
雪にとけつつうつる心は
六〇 り 輪廻とて絆に曳かれ人毎に
あはれ浄土の道忘れけり
六一 て 蝶やいかに菜の花露に眠る身の
はかなき世をば思ひ知りきや
六二 ま 誠より称ふる御名は極楽の
疑ひもなき通り切手ぞ
六三 う 裏も無く念も忘れて心よく
終に行くこそまこと行くなれ

住み果つる浮世ならねばよき時に
六四 す 迎ふ仏に身をまかせてん
六五 ね 願ふなり罪の重荷を老の身の
我から先へ助け給へや
六六 む 六十余り此の世を松の下庵に
心ばかりは通れてぞ住め
六七 ふ 不可思議の尊き仏の御名をただ
ねてだにもいふ法ぞ嬉しき
六八 つ 津の国の難波堀江のよしあしを
心にかけて仏許ゆけ
六九 に 西の空仰ぐ度にも思ふかな
いつか我身も迎ひとられん
七〇 も 物思ひ限り知られぬ浮身をば
はやくも頼め弥陀の誓ひを
七一 あ 浅しや遍き慈悲を受くる身に
生れあふとも知らで過ぎぬる
七二 ら 楽をせず心やすかれ仏をや
つかへまつりて生活をせよ
七三 す 須弥の峯幾千の谷も郭公
野に啼わたれ人の聞くかに

(つづく)



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活 [七]

群居・闘諍の誠め

宝田正道

法然上人は「闘諍」ということを極度に嫌われた。つまらぬことで激しく言い争ったり、怒って喧嘩をしたりすることである。これは、生来平和圓滿を好む上人の性格にもよるのであるが、また、源平の血醒い戦乱の巷や南都北嶺の僧兵たちによる暴逆の嵐をいやというほど身をもって体験せられた時代の影響にもよるにちがいない。その師叡空との口論や大原問答などによる討論は、学問上のことであるから、その点ではあくまで自説を譲らなかつた上人も、世間でよく起る相続争いその他の俗事で喧嘩するほどばかげたことはない、と信じておられたようである。

だから、建久九年（一一九八）の春、六十六歳の時に示された没後起請文（遺誠文）の中でも、「闘諍の基い集

に由るが故」に「努努一所に群居して諍論を致し、忿怒を起すこと莫^なれ」と固く誠められているのである（『古本漢語燈錄』卷十）。また、古今を見聞するに人の没後には多くの喧嘩あり、これは遺産を諍うのが原因であるから、わが弟子同法のうち志あらん者はこの趣を明察して「わが没後において諍論を起すこと莫^なれ」といい、多年入室の弟子として、信空、感西、証空、円親、長尊、感聖、良清の七人に限って遺囑を与える旨を明記しておられる。

上人は、建暦二年（一二二二）正月、病篤くして臥っておられた時、法蓮坊信空が、「古来の先徳みなその遺跡あり。しかるにいま精舎一字も建立なし。御入滅の後いづくをもてか御遺跡とすべきや」（『勅伝』三七）とたず

ねたのに対して、次のように答えられたので有名である。

あとを一廟に占むれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍満すべし。

(御遺跡のことにつき法蓮房に示されける御詞――

『勅伝』三十七)

これはつまり上人の確たる無寺院主義の表明である。すなわち、特定の場所に伽藍を建立して後世に残すことは、信空のいうように当時の仏教界一般の習わしであった。しかし、上人はそれを形骸化したものと見なし、形はなくとも、心のこもった念仏の声するところこそ、実質的な生きた遺跡である、と考えられていたのである。

たしかに「念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」と主張された上人の心の中には、念仏の布教に名を捨てて実を採るといふ広大な理想が含まれていたことであろう。また、これによって念仏が寺院というワクに縛られず、日本中のすべての土地に法水の流れるごとく行渡って行きやすかったことも事実である。

しかしながら、上人のこの無寺院主義の根底には、も

う一つ、より大きな目的が備わっていたことを看過してはならないと思う。それは、いうまでもなく、先に述べた「闘諍」を避けるという意味である。つまり、上人がなぜ無寺院主義を強調せられたか、という点、それは寺院を建てると人が群集しておのずから何らかの「闘諍」の因縁をつくる、と考えられたからではなかったろうか。

孝養のために精舎建立のいとなみを、なすことなかれ。心ざしあらば、をのをの群集せず、念仏して恩を報ずべし。もし群集あれば闘諍の因縁なり。

(「上人臨終のとき遺言のむねありとして」『勅伝』三十九)

この法語は、上人臨終の時の遺言の言葉である。この言葉からしても、上人がいかに精舎建立の営みを禁じていられたかがわかる。それにもかかわらず、信空は世間の風儀に順じて、念仏の他の七日七日の仏事を修すべき旨を主張したので、諸人もこれに随った、と伝記は伝えられている。信空にしてみれば、いかに師の仰せとはいえ、その追善供養を何一つしないで放っておくなどというこ

とは、どうしてもできなかったからに違いない。たとえ仏事のために群集しても、「鬬諍」ということさえ起さないように注意して行えばそれでよいではないか、とさえ理解して、それに踏み切ったのかもしれない。現代でも、よくある例で、故人が葬式無用と遺言して死んでも、遺族や友人知己にしてみれば、やはり世間的にたとえ質素に葬うとはいえ、これを営むのが人情というものである。

さて、このようにして法然上人は、念仏の勧化のためと鬬諍の因をつくらないためと、この二つの理由によって遺跡としての寺院建立を抑えてこられたし、その掟もある程度は守られてきたようである。

しかし、肉食妻帯や飲酒を禁ずるという伝統的な戒律の力が、時の流れとともに破棄され弱められるようになったのと同じように、上人のこの遺跡観も、時代の風潮や人情の移り変りには抗すべくもなく、次第に影を薄めざるを得なかった。それでも上人の遺志は、滅後四、五百年の間、他宗に比べてはどうやら生きてきたようであって、上人の遺跡と称するものが「二十五霊場」と正式に銘打って一般に公開されるようになったのは、むしろ近世に下ってからといつてよい。すなわち、江戸時代後

期の奇僧横井金谷が伝えているように（法然上人御画伝略讀）巻下付言、上人の遺跡を二十五カ所選んで霊場回りが發起せられたのは、上人の五百五十回遠忌（宝暦十一年）を記念する意味で、正に宝暦年間（一七五二—一七六三）になってからのことである。やや遅れて関東十八檀林巡拝や円光六師御遺跡四十八所巡拝も行われるようになり、撰門や徳本、愚仙らも巡拝記を著わして深い関心を示している。しかし、この目的が、「道中念仏三昧」で、上人の専修一行勧化の精神をとり、また「道中にては心をやすらげ、同行たがひにけんくわ、又ははら立なとすへからず」と規定して上人の鬬諍禁止論に気を配っている点はおもしろい。

ところで、念仏は普及したいが、遺跡をつくったりして鬬諍の種をまくことを嫌った法然上人は、つとめて群居することを警戒された。この志は、早く少年の頃、師の皇円に「今はすなわち居を山林に卜し、跡を煙霞に暗さん」と申し出られた（十六門記）五、ことによっても察せられるが、とにかく「静処に閑居して独行念仏するに如かず」（没後遺誠文）というのが、上人の本意であった。だから、立教開宗の後も、あまりあちこち出歩くこともせず、もっぱら東山吉水の庵室に籠って称名一途に

明け暮れておられたのである。

上人は、行基や空也や一遍などのように、全国を行脚して法を説き、あるいは池を掘り橋を架け寺を建てて歩く、いわゆる旅僧のタイプではなかった。旅僧というのは、旅商人、旅侍、旅役者などの熟語と並んで、諸国を行脚して法を弘める雲水のな僧を指す総称である。中には「諸国一見の僧」（謡曲に出てくる）のように、漫然と名所旧蹟を訪ねて歩く種類の僧もいたが、おおむねは、旅を命がけの乞食修行と心得、芭蕉ではないがそれこそ「野ざらし」を覚悟で社会公共の役に立つとともに自らの試練に資したい、と祈願してわらじをはいたものである。だから、それらの僧が留錫したり止住したりする草庵や伽藍には、手っ取り早くその人の名をつけて、後世の者がこれを遺跡として追慕した場合が多い。「行基焼」「弘法麦」「隠元豆」「沢庵漬」のように、各地の産物や名物などにまで、その名が広がることさえある。それもそれなりに僧の生き方の一つとして立派なことである。しかし、法然上人には、孝か不孝か、そういう種類に属する事蹟は何一つない。つまり、布教僧というよりもやはり学問僧として終始されたといつてよいのである。もっとも、世に「法然寺」「源空寺」などのよう

に、上人の名をつけた寺院は少くない。知恩寺の近辺には、「法然水」や「法然筋」あるいは「法然辻子」などという名が残っているところさえあり、先にあげた二十五霊場の中には、「遺跡」にこじつけるために、いろいろと工夫をこらして師名を借りた所も見受けられるようであるが、それらはむしろ珍しくいいである。

このことは、法然上人の行動範囲の狭さからも裏づけられよう。上人の生前歩かれた地域は、京都を中心として、奈良、高野、伊勢ぐらゐで、あとは流罪のために「事の縁によりて」仕方なくまわられた瀬戸内海沿岸の舟すじに当る地方に限られている。遠江や歌山は例外に属するといえよう。後世の人は、これで物足りない思いをしたのか、青森の浅虫温泉あたりまで上人が足跡をのばされたかの如き伝説をつくり上げて喜んでいようであるが、功德となればそれもよろしかろう。ただ、上人は、あくまで平和主義に徹した念仏者であり、そのため「遺跡」という寺院建立さえ思い止まって「闘争」の根を断とうとされたことを忘れてはならない。凶器準備集合罪などで手配される乱闘好きの内ゲバ族や暴走族の姿を極楽からごらんになって、さぞかし嘆いていられることであらう。



欧米宗教見聞録

第六回

禅仏教の流行

安居香山

(大正大学教授)

欧米旅行をして帰ってから已に半蔵になる。遠い過去の夢のように思われ、時々写真を見ては、思い出多い一人旅を懐しむ今日この頃である。その思い出も、幻のようになるものが多いが、中において、私の脳裏に深く印象づけられていることは、欧米における禅仏教の影響である。

鈴木大拙博士によって、主として米国に禅が宣揚された事は、学生の時代から知らされていた。「禅と日本文化」という名著も、何度が読んでいる。しかし、それが今なお強い影響力を持ち、アメリカだけではなく、欧州全域に及んでいる事を知ったのは、驚きであった。

何処の国へ行つても、私は本屋をのぞくのを楽しみにしていた。そして、日本を紹介したものに、どんな本があるかを

探し求めた。その中で、先ず最初に目に入ってくるのは、ZENという横文字であった。それにならんで漢字で「禅」と書かれているものもあった。鈴木大拙全集の英訳本も多くの国の本屋の店頭でみた。鈴木禅の影響の大きさと、根強よさを、厭という程知らされた。時に宗教系の紹介本もあったが、終に私は、浄土教系の紹介本を見ることができなかったのは、残念であった。

欧米では、ヨーガが流行しているようで、これとの関連で禅を見た本も、いくつもあった。宗教系の本は、東洋の神秘をあらわす代表的なものとして、関心が持たれているようであった。そうすると、浄土教は、欧米人に興味がないのか、或いはわれわれの宣布が足りないのか、いずれかであろう。



弟子丸泰仙師と共に

くそれは、弟子丸泰仙師の禅布教である。

パリで弟子丸師が活躍していることを知っていたので、折を見て出掛けてみた。お会いしてどうこうするという程の考えも無く、とも角、坐禅が行われているということが、どんな状況なのか見るのが目的であった。地図をたよりに地下鉄で道場のあるベルネティに着いた。ZEN道場はすぐその近くにあった。そこにはZENと書かれた店らしいものが、道路に面してあった。この店は、弟子丸師の経営にかかると、日本の食料や雑貨を売っていた。中には着物や衣まで売っていた。この売りあげは、師の弟子達の養成費の一部に

こうした中で、私が最も驚いたのは、パリを中心としたヨーロッパでの坐禅の流行であった。已にこの事については、あちらこちらで書いたのであるが、此処でもやはりこの事は、書かねばなるまい。いうまでもな

あてられていると聞いた。この店の奥には、小さな部屋があり、ここは、後で分ったのであるが、弟子丸師と弟子達との対話の場にあてられるものであると共に、簡単な昼食（例えば日本のそば）ができるようになっていた。店にいた若い人に聞くと、弟子丸師はいるが、忙しいので仲々会わないという事であった。



ZEN<禅>の店（パリ）

「日本の人も随分訪ねてくるが、興味本位で来るので、余り心よく思っていない」

とも言っていた。私は師に会えなくても止むを得ないと思い、とも角名刺を通じてみた。

やがて青い目の僧形のフランス女性があらわれ、

「弟子丸師に会

「いたいのはあなたか」

という。これも後で分ったのであるが、この人はムリエールという尼さんで、師の身の廻りを世話している一番弟子の一人である。私が発見する前に日本に来て、日本でも評判になった女性である。とも角そんな事で、思いもかけず面談でき、意気軒昂たる師の姿に接し、ヨーロッパに居る私を忘れる程であった。師は写真でも見るように禅僧独特の衣スタイルで、その顔相は達磨大師を思わせるような人で、ドスのきいた声と共に、ヨーロッパ人は、きつと先ずこの風貌に魅せられているに違いないと思った。師のヨーロッパでの活躍は、その著「ヨーロッパ狂雲記」「禅僧ひとりヨーロッパを行く」などで知られているので、こ



禅道場

こには細かく書かないが、とも角「坐禅」という実践を通して、仏教の何であるかを知らせるのが、目的であるという。

ZENの店の裏手に禅道場があったが、なんでもこれは、アンドレ・マルローのアトリエを改造したもので、広さは二十畳位に思えた。或る日私はここで、青い目のフランス青年男女と参禅をしたのであるが、中には得度をした人もいて、衣、袈裟姿のもいた。坐禅は毎日一時間ずつ五回位に分けて行われるのであるが、来た者から思い思いに壁に向かって坐禅していた。その中に弟子丸師があらわれ、警策の音が響きわたり、禅堂での雰囲気、ここでもみなぎった。

坐りなれない人もいて、終って転ぶ程の人もいた。按摩をして、もみほぐしている者もいた。ここでは、坐禅後、禅問答が行われるのであるが、これが仲々に興味があつた。英・仏語で行われる問答の内容は充分分らなかったが、何でも禅の根本問題が議論されていた。

「坐禅中はとも角として、それ以外の時に忘想が起つてくることが、どうして防いだらよいか」

こんな具合の質問もあった。師はこれについて禅の立場からいろいろ説明していたが、まさにこれは、仏教の根本問題である。

難しい禅問答は道場で行われるが、気軽な坐談は禅の店で



禪問答

行われる。談論風発と言った気分が此処にはある。ここではブドー酒もあり論は一段と高くなる。弟子達と膝を交えての業の論議が、師と弟子との固い紐帯になっている様に思えた。師の人格がここで本当に生かされている。

師にはヨーロッパ各地に七、八万の弟子と称する人がいるという。坐禪を通しての弟子である。師はこれをもって、キリスト教や、唯物主義で荒廃したヨーロッパに、大乘仏教の精神を打ち込み、物質文明で地に落ちた人間を復興するのだという。仏教は、東洋で開花したが、再びヨーロッパで開花すること、夢ではない。

師はバリー郊外のアバロン市に、一万坪の土地の寄進をうけて、大乘禪寺を建立した。単なる曹洞宗の禪寺でなく、大乘仏教のヨーロッパにおける基地にするということである。坐禪は一つの手段に過ぎないのであって、宗派にとらわれぬものであれば念仏でも何でもよいという。日本仏教の協力を期待している。

師はこの六月一日に、長野の佐久市にある清久寺にも入山した。佐久市とアバロン市は已に姉妹都市になっており、清久寺には師の留守中、仏人のアラン・カッサン師が入寺し、寺を守るかたわら、フランス語を町の人に教えるという。日仏交換がこんな所でも、実現しようとしている。

仏教は、確かに今日の世界危機を救う目である。然し、この目を本当に生かすかどうかは、仏教そのものより、仏法を動かす人そのものにあると言ってよいようである。その意味で、ヨーロッパでは、よい法の番人を一人得たと言えそう

だ。
私の旅日記は、未だ書きたい事もあるが、事宗教に關しては、この程度で絶えとめが終ったようである。貴重な体験を、これからの生活に生かしていきたい。

書 の 四 季



俊乗坊重源のこと

林 錦 洞

(書 道 家)

俊乗坊重源上人は建永元年(一二〇六)今から七六九年前の六月四日に正念往生を遂げられた方です。そこで今回は上人のことや、その書についてふれて見たいと思います。

ご承知のように俊乗坊重源上人については、あの有名な東大寺再建の勸進職として俊腕を振われたこと、それにもまして大原問答の折に、宗祖法然上人と六字名号の本体とそのはたらきについて論戦を交え、遂に法然上人の膝下に帰伏したことが有名です。

上人の寂年につきましては異説もあり、建久六年七十余歳とか、元久二年八六歳とか伝える向きもあるようです。仮に建永元年説(明月記・三長記など)とすると、逆算して鳥羽帝の保安元年(一二一〇)という計算になります。

す。京都の生れで紀氏を称し、紀李重の子、刑部左衛門尉重定を父としたと言われています。十三歳醍醐寺に登り真言を学びましたが、後に榮西禪師と入宋もし、浄土五祖図や観經曼荼羅を招来しています。勸進義の教義を唱え、十穀聖とも呼ばれ、法然上人と同等の学僧であったとも伝えられています。

大仏殿の勸進職についてからは、入宋の知識を生かして大仏鑄造には宋人を使ったり、醍醐寺に宋本一切経を施入しております。上人はこの外にも造寺造像など數十ヶ寺に及んだと言われ、周防四国越中信濃と広範にわたる、また法筵を開き、伊勢神宮にも東大寺再建を祈願して三度も参籠しています。他面農業灌漑や道路、橋などの開通にも力をつくしていました。

大仏殿勸進については、法然上人の大檀那である藤原兼実公とも親交があったようです。当時兼実公は頼朝の信用を得て姻戚関係を持ち、宮中にも大変な実力を持っていたから、何かにつけて勸進の陰の力となって支援を受けたことと思います。その故ばかりではないでしょうが、大仏殿建立に当っては、頼朝も黄金千枚、奥州秀衡も黄金五千枚を献上し、入仏法要には伝灯大和尚位の宣旨を受けており、頼朝も臨駕しています。

大仏殿は治承四年十二月、平重衡の南都征討に遇い、興福寺と共に炎上しましたが、上人は、翌養和元年十月より、事実上再建に努力しており、東大寺にはこうした上人の徳をたたえて、俊乗堂や俊乗像も残されており、上人が宗祖法然上人との出会いを経て帰伏したのは文治二年と言われておりますが、東大寺勸進職に推挙したということについては本質論から言えば問題もあろうかと考えられます。というのは法然上人のお言葉の中に次のようなことが伝えられているからです。

「源空が好むところは念仏勸進の行なり。起立造像の大勸進職は其の器量にあらず、若し勸進の職に応ぜば

世務心を悩めて念仏退転しなん、念仏永廃せば唯仏意に背くのみにあらず、兼ては亦和尚の意に違はん云々」と仰せられて、上人の御本意は御自ら、念仏のさまたげになることを戒められておられるように拝されるのです。ところで重源上人の書ですが、東大寺流記帳奥書、岡山金山寺、防府玉祖神社目録などを見ますと、仲々の達筆で、大胆な墨付きで筆を運び、当代の流行である「世尊寺風」の和様の中にも、重厚な中国の顔真卿の書を連想させるものがあり風格があります。どっふりと墨付きした丸味と、筆庄の強さ、はげしさ、そして筆先にゆとりを持って潤達に次え次えと動いて行っています。リズムカルな動きは見事であります。花押も潤達で筆のきびしい動きがダイナミックです。重の字の草体をデフォルムしたような形の花押にも見えます。

浄土宗の列祖方や名僧方にはまだまだ書道も窮められた見事なものがあります。書は名前を記するに足るとは俗説で、やはり本格に書道をやり、その上に、にじみ出る風格こそが万世にわたって見るものの心に迫って来ることでしょう。

心と自然環境



横山 紘一

(文化庁 宗務課)

海は、今や死に瀕しております。先年、神戸より別府まで船で渡った折りのショックは今でもわたしの心を痛めております。瀬戸内海は、最早わたしの心の中の瀬戸内海ではありません。子供時代の、あの青い海は何処にも見当りません。——自然環境の汚染および破壊は、今や人類の存続を脅かす問題にまで発展してきました。この問題を仏教的立場よりいささか考察してみたいと思います。

仏教は自然環境に対して次の二つの見方をとります。

(1) 五欲として

(2) 器世間として

五欲とは、色、声、香、味、触であります。つまり、

眼・耳・鼻・舌・身という五つの感覚器官によって認識される対象であり、自然界を代表する五つの要素つまり五境といわれるものであります。

ところで、これら五境が五欲というように「欲」をつけて呼ばれるのは、それらに対して我われが欲を起し執著するからであります。執著は煩惱を起し、その煩惱によって心は束縛され、自由を失なってしまう。したがって、外界の刺激物であるこの五境より我われは遠ざからねばなりません。それらの刺激から我われの感覚器官を守護しなければなりません(専門的には「根の守護」といいます)。このように、仏教は先ず第一に、「自然環境から遠ざかれ」という命題をたてます。つまり自

然環境の否定であります。

しかし、もう一つの見方、すなわち自然を器世間としてみるならば、自然環境は肯定さるべきものとなりません。自然は人間をその中に住せしめ維持している器（うつわ）なのであります。容器が壊れれば、中の水は流れ去ってしまうように、我われを取りまく自然界が破壊されれば、当然その中に住む人類は滅亡してしまふであります。人類の存続には、器の、つまり自然界の正常な状態が必須条件であります。

このように考えてまいりますと、我われは自然環境に対して、それから「遠ざかれ」という否定的態度と、それを「保護すべきである」という肯定的態度との二つの態度をとる必要があることとなります。このうち、「遠ざかる」ということは、自然破壊という意味での否定をいうものではありません。欲の対象としての自然環境から遠ざかり、自己の心を動揺から守ることであります。自然は敵として存在します。これは動かしがたい事実であります。ただその自然の一部が、我われの欲の目を通して眺められた時に、自然は欲境と成るのであります。緑の山林は酸素を出して空気を浄化し、風雨から山くずれを守る大切な器世間であります。しかし、この同じ自然

が、ここを切り拓いてゴルフ場にして一儲けしようという気持ちで眺められれば、器世間変じて欲境となるのです。自然を五欲境と器世間との二面より把えた先哲の深い意味を現代人は再考すべきではないでしょうか。

現代人の物の見方は二元的であるといわれます。自然界は自己の外に実在し、人間によって征服されるべきものであると考えます。この考えが、現代という科学技術の全盛時代をもたらしたのであります。また同時に公害という弊害をも生みだしたのであります。自然は自己を離れて外界に実在する、簡単にいえば、自己以外の存在物であると思ふからこそ、自然を粗末にするようになるのです。自然は自分が作り出したもの、自己の心を離れては存在しないもの、つまり、自然は自己の心の一部であるともみれば、自然を大切にする気持ちに当然なるでしょう。真理は、唯心論であろうが、唯物論であろうが、どちらでもよいことです。現代人は、もしも人類存続を望むならば、唯心論的自然観をとらざるを得ないのであります。二元性を離れて、自らの心と自然とを一元化せしめること、つまり自然を征服するのではなく自然と一体に「成る」という精神を養うべきであります。

以上、述べてきましたことをまとめると次のように図

示されると思います。

成(即)



離(否定)

護(肯定)

ハガキでひと言

川村悠穂

(静岡市大鋸町西福寺住職)

今年は終戦後満三十周年を迎えます。

ベトナムにも、やっと平和が訪れたようです。一般人はすぐ溶け合っているというのですが、誰がどうして戦争を続けたのでしょうか。戦争が終ったとしても亡き夫、或いは亡き妻、子や親たちは再び戻っては来ません。山や川は冷たく、そして暖かく平然とその回りにあるだけです。その憶い

おぼん

欲の対象としての自然から「離」れることは、心を安穩に保つと同時に、自然環境を破壊や汚染から「護」ります。そしてこの「離」と「護」の両面を包括するのが、自然即心とみる「成」の立場ではないでしょうか。いま一度、心と自然との関係を心しずかに考えてみようではありませんか。

は一生つきまとうことでしよう。

そして建直しが始まり、新しい時代が遠慮なくやって来ます。

終戦後の日本は、ただ経済発展、暮しの豊かさを求めましたが、その裏側には労資の闘争、学生騒動、そしてアナキストといわれる若者が誕生し、連続企業爆破事件等が起りました。

「おぼん」は人間の苦しみを救うということだそうですが、それはお念仏より他ないということです。

我はこれ無知の身なり、我はこれ破戒の身なり、然りとはいへども弥陀の本願、口称念仏の力に依りて、決定往生を

遂ぐべきなりと

(徹選採集)

高市雲城

(富田西小学校教師
山口県徳山市山田川在住)

私の参る墓の近くにS家の墓がある。昨春、彼岸参りをした時、隣りあっている墓の美しさにくらべて、墓参りの形跡のないS家の墓をわびしく思った。

その年の盆には伸びた草だけが墓よりも高くなり、冬には枯れた草がカサカサと風に鳴っていた。そして今年の春には、その枯草の間から、また次の草の芽が伸びてきていた。やがて今年の盆がくるが、また伸び放題の草に埋まるのではなからうかと気づかっている。

S家は墓参りに、何ほどの時間もおからない家であるが、私は老人のいない核家族の一面をみせつけられ、そのような墓を、何ら気にかけていない若い人の心の中を、悲しいと思うのは私だけではあるまい。

私は現在在家にあって、教育の仕事に専念しているが、子どもたちに、おぼんを機会に、せめて自分の祖先と、そして現在ある自分と未来をつなげていく子どもに、わが家の今日

あることを、墓参りという一つの形式を通して肌で感じさせ、やさしい心情を育てるための与言の教育の場としたいとしているのは、私の我田引水だろうか。

塩亀義弘

(京都市下京区上徳寺住職)

家々の木魚のさまは異なれり

響く音色に何語りいむ

これは或る夏の作である。京の八月の暑い盛り、バイクに乗って檀家へ、棚経まいりをする。毎年のことながら、はや三十回となる。

「おぼん」のおまつりは、それぞれの家の趣きでなされる。お参りに訪れた短かい間の会話に、一年ぶりにお会いする人もあり、懐しく、またつきない訳が出てくる。

家の中に満ち響く木魚の音。この音の世界に、無心のひとときを過し、み仏のみ姿を拝し、亡きご先祖の声を聞く。心より合掌、誦経して、ご先祖のみたまにご供養し、人々と共に生かされている喜びを持つのである。

「おぼん」がまた近くなってきた。



ポストの中のパスポート

Ⅱ 迂闊な旅・顛末の記 Ⅱ

青 山 香

(東京都江東区清澄在住)

「起ってしまったことは仕方ありませんよ。一週間後バリで再会できることを確信して、心丈夫にお越し下さいね」

同行のHさんから慰めのことばをいただいた私。

「ええ、大丈夫です。駆け回りで見学した所を、改めてゆっくり見直しますから」

と、笑顔で答えてみたものの、ようやく友だちになれた同行の方々二十九名と別れ、唯一人マドリッドに残る羽目になったってしまった私。

「早春のヨーロッパ特選ツアー」と銘うつ、マドリッド・ローマ・ジュネーブ・バリの各都市を訪問する旅行に参加した私は、初めて見るヨーロッパへの旅情で胸はずませ、機上の人となりました。それは各地からの花の便りが聞かれる三

月二十九日のことでした。

そして、二十数時間にもおよぶ飛行機の旅の末、最初の訪問国、スペインに無事到着。時差ボケもどこへやら、イスパニヤ王国盛んなりし頃の面影を偲ばせる、城址・名所を見学。見るもの、聞くことすべてが珍らしく、ただ驚きの中に、あっという間に二日間が経てしまいました。

こうして三日目。運命の日の朝を迎えたのです。この日は、夕方六時にローマへ立つまでフリータイム。私は共に参加した女学校時代からの友人さんと、案内図を頼りに、勇んでマドリッドの街中へ出かけました。けれども所詮ことばのわからないおばあさんの二人連れ、その行動範囲は知れたものです。同じところをあちこちと歩き、早く時間が経つのを

スペイン広場（マドリッド）



待つばかりでした。

それでもそこは女、ショークースに飾られた品々を見歩き、気をまぎらし、目をたのしませました。土産ものはローマかパリでと思っただけのもの、見るごとにほしくなるのです。意を決め、嫁と娘にハンドバッグを買い、集合場所のホテルへもどりました。同行の方々も三々五々、それぞれの時を過ぎ

集まってまいりました。

情熱の国スペインとも、あと二時間あまりでお別れ。出発までの間、お互いのフリータイムでの戦果を披露し合い、その度ごとに大笑いが続きました。しかし、何故か私はたのしいはずの話しの輪にとけ込めないのです。頭の中にあるのは、街角の靴屋さんのショークースに飾られた、あのグリーンのパンプスのことだけなのです。気持としては買いたいが、あとの旅程を考えると、あまり無駄使いはできません。ああ、どうしたら良いのかしら。

そんな私の様子を指してか、Nさんが、

「青山さん、思いきって買いなさいよ。もう二度と来れないでしょうし、日本へ帰ってから、買って来ればよかったっ



マドリッドの一角で

ていつても遅いのよ」

と、半ば呆れ加減に、私に決断を迫りました。

もう出発まで一時間あまりしかありません。意を決めた私は、手荷物を託し、ホテルから百メートル程離れた靴屋さんを目指して一目散。

「あった、あった、あの靴が」

年甲斐もなく昂奮している私。やっと望みがかなえられたのです。そして靴の入った袋を大事に抱え、ホテルへ戻るや否や、私は腫物にさわるが如くに、今買ってきた靴を見せびらかしました。

「さすが青山さんをご執心することあるわね」

同行の女性方から、口々にお褒めのことばをいただき、これで良かったのだと一安心。

「青山さん、ハンドバッグの口が空いていますよ」

という、Mさんのご忠告で我にかえりました。確か掛けた筈の口が空いているのです。中を確かめる。

「ない、パスポートがない」

どうしたら良いのかしら。縦長のハンドバッグのため、財布は横に入りましたが、パスポートは入らないので赤いケースに収め、縦入れしていたのです。

外国旅行では命の次に大事なパスポートを無くしてしまっ

たのです。和気あいあいの旅も私の不始末から、一瞬にして暗いものとなってしまいました。靴に夢中になっていた私が見せたスキ。まんまとすられたらしいのです。

運悪く、この日は日曜日。しかも午後の五時過ぎというところで、大使館、警察署等連絡がとれません。出発の時間は刻一刻と迫り、あとがありません。迎えのバスはすでに待機中。パスポート無しでは出国もできません。再発行まで一週間はかかる由。後事を現地旅行社に託し、仲間は出発しざるを得ない時間となってしまいました。

この靴一足のために、取りかえしのつかないことをしてしまった。先程までの有頂天の気持から、奈落の底へ突き落とされたのです。しかし靴は何も語りません。

ねむれぬ一夜が明けました。窓下の街は何事もなかったかのように、通勤通学の人びとでいっぱいです。ただ一人、私だけが取り残されているのです。街に出る元気もない私。

そんな私を勇気づけようと、事情を知ってか知らずかホテルの人びとが、自分達がしたかのように、自国民の不始末をわび、あれこれ世話をしてくれ、幾分か心休まる思いがいたしました。

「トントン」午後二時すぎ、ノックの音で目がさめました。いつしか眠っていたのです。

てみました。痛い。夢ではないのだ。私のバスボートが見つ



街角で（マドリッド）

「青山さん、バスボートが見つかりました。もう何の心配もいりません。夕方の便でローマにお立ち下さい」

日本大使館の書記官の方が、わざわざ届けに来て下さったのです。私は夢見心地、思わず頬をつねっ

かったのです。

それにしても早く見つかったものです。書記官の方にその顛末を尋ねてみました。

「青山さんは、全く幸運でした。バスボートは、このホテルの前のポストの中から出て来ました。しかも犯人の詫状がはさまれて」

その詫状には次のようなことが書かれていたそうです。

「浮かれ気分の旅行者を見て、自分の立場を考えるとさげなくなり、気がついた時には赤いケースを手にしていた。金目のものは何も無い。捨てようと思ったが、旅行者の笑顔を思い出し、届ける勇気がなかったのです、このポストに入れておく。旅行者にくれぐれも詫てほしい」

この被害にあった時、神も仏もあるものかと思っていた私でしたが、憎いという気持はうすれ何となく見知らぬ犯人がいておしくなり、手を合せ心の中でお礼をいいました。責められるのは迂闊であった、この私なのだ。異邦を訪れ、その事情をよく理解しないで行動していた私。そんな私に、気持の入れかえを論し教えてくれました今回の事件。

「地獄で仏」とは、こんなことなのかなどと思いつつ、複雑な気持が交差するなか、心配しながら旅行を続けていられる、同行の方々が待つローマへ立ったのです。



念佛ひじり三国志

(五)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

うっとりとし生仏の琵琶に聞き惚れていた三位中将重衡は、一曲の弾奏がおわると声をかけた。

「青海波はできるかね」

「青海波を、琵琶だけで弾ずるのですか」

盲目の琵琶師はいぶかしげに訊きかえした。唐からつたえられたこの名曲は、おびただしい管絃鼓笛で合奏されるものなのだ。

「そなたは琴を弾け。わしは高麗笛を吹こう」

重衡は妻をうながした。しかし、深夜である。侍女たちを起こすではないぞ、とも言い添えた。若い夫婦は自室にいったん戻ると、二人して七絃の唐琴を運んできた。

合奏の呼吸はびったりであった。というよりも生仏の正確そのもののリズムと調声が、小宰相の琴を、重衡の笛を青海波の魅惑の調べへ没入させてしまうのである。彼らは琵琶の響きを追っているだけでいい。

深夜の六波羅邸に、時ならぬ歌の宴がくりひろげられた。それは荒くれた平家武者どもの夢寝（むび）を甘美な世界へいざなった。

三人が呼吸を合せて弾奏する前庭から遙か離れた寝室で眠っていた平相国清盛は、夢うつつのなかで、手の平で帳台の端を叩きはじめていた。

「どうなされましたか」

妻の時子が声をかけた。

「うむ……難造（なやらい）の節会へつらなる夢を見た。青

海波で鼓を打っている夢だ」

「夢ではありませぬ。あの琵琶法師が青海波を弾じているのでございます」

「しかし」

と、清盛は耳を澄ました。

琵琶だけではない。琴も笛も助音している。いったい誰が合奏しているのか、

「見てまいれ」

と妻に命じた。帳台をおり、足を忍ばせて内庭の方へ渡っていった時子は、やがて戻った。

「重衡夫婦でございます」

顔をほころばせて報告した。

「左馬頭だったか……うい奴じゃ」

清盛もなごんだ。

当時の重衡は、まだ正四位下で左馬頭だった。時子が生んだ男児の末弟である。

勇気りんりんの若大将で、つねに武技をみがいていた。

腹違いの長男重盛は別格として、柔弱な宗盛や鈍重な知盛に比べ時子が眼に入れても痛くないほどに愛してきた息子だった。

勇気りんりんの重衡に、このような雅趣があった。そのこ

前号のあらすじ

非業の最期を遂げた信西入道の遺児達は、年月が経つとともにいずれも桑門で頭角を表わしていた。なかでも長兄の信濃守是憲は、今は念仏の聖として西山広谷に隠棲はしていたが、遊蓮房円照と名乗ったその名前は多くの善知識に聞えていた。かの入法然房源空もまたその人柄を慕って叡山黒谷を後にしたのであった。一方、末弟の奈良の小僧都と呼ばれた明通は、南都三論の学匠として令名を馳せ、すでに最勝講にもその名を連ねるようになっていた。

しかし世は平家全盛の時代であった。平清盛は宿願の福原遷都を断行し、その権力は欲するがままに増大した。こうした世の流れに対して、都の北鹿ヶ谷の山荘に反旗をひるがえそうとする集団があった。大納言藤原成親、法勝寺執行俊寛僧都、それに信西入道の旧臣藤原西光など——治承五年（一一八二）五月、世にいわゆる「鹿ヶ谷の変」であった。だがこの企みもまた多田藏人行綱などの裏切りによって失敗してしまう。姉小路の旧信西邸にも西光を目差して平家の武者達が荒々しく入った。盲目の琵琶法師生仏も今は捕われ、最後の夜に悲しく琵琶を弾ずるのであった。

とを夫の清盛に認識してもらえたのである。

時子はたまらなく嬉しかった。

「あの嫁もよく出来ております」

「輔子か」

清盛はなおも帳台の端を手の平で打ち続けながら、上機嫌である。つい先刻、西光の前で荒れ狂った入道相国とは別人の観があつた。

ところで重衡の妻小宰相輔子は、大福長者、邦綱の娘であつた。清盛と大納言邦綱との親密さはこれまでしばしば触れてきたところだが、娘の輔子を重衡に妻合せたばかりか、邦綱は息子の清邦までも養子におくりこんでいる。

「あの盲人の琵琶師だが……」

と、清盛はひとりごつように洩らした。

「巧みな音色を弾き出します」

「巧みさだけではない。天性の音感を持つておる。殺すにしのびぬな」

「ひとりでも助けてあげて下さいませ。それが仏心と申すものでございます」

時子は懇願する。

若い生仏の命を惜しんだからではない。夫の清盛から、少しでも殺人の罪業を除いておきたいのである。

「しかし奴は、銭のことでわしの政道をなじった」

理路整然と非難してきた盲人の言葉を、清盛はまだ忘れていないのである。

迷っていた清盛の心は、翌朝、決した。重衡夫婦が生仏の

助命を願ひ出たからである。

「許すわけにはゆかぬが」

と、清盛は条件をつけた。

生仏の身柄を、虜囚として重衡夫婦に預けるというのである。

「盲人ゆえ、何処にもゆけぬであろうが、おぬしの手もとに置いて琵琶でも弾かせておけ」

酸鼻をきわめた鹿ヶ谷事件の処刑中、唯一人の例外として生仏は六波羅屋敷に住みつくようになった。

酸鼻の極は西光の処刑だった。

息のあるまま鼻を削り落され、両眼をえぐられ、閉じた口を無理矢理にひらかれて、そこへ汚物を詰めこまれたあげく、首を斬り落された。

その首は、朱雀大路にさらしものになった。

西光法師が処刑されたこの日、大納言成親も捕らえられた。義兄弟の平重盛は、まだ事件のことを知らされていないかつた。

おどろいて父清盛に問いただした。

「西光奴が画策しておつてな。しかし首謀者は院の御所だ。が、まさか法皇に手を下すわけにはいかん。新大納言にはその身代りとなって、半年もどこかの田舎で蟄居してもらおうかと

＜絶呼の俊寛＞



思っておる。そうでもしないと、平氏の沽巻にかかわるでな
あ」

名分的な刑罰だと言いたげな口ぶりであった。

平家追討の陰謀が明るみに出た以上、それもやむを得ぬ処
置だ、と重盛は諒承した。

大納言成親を虜室に訪れた重盛は、

「ご懸念なされることは一切ございませぬ」
となぐさめた。

やがて成親は備前の配所へ送られた。しかし清盛には生か
しておく腹はさらさらなかった。旅中、全く食物を与えず、
飢えた口に強烈な酒を注ぎこんで悶死させたとも、断崖から
突き落とし、その下で飢えた山犬を待機させ、喰い殺させたとも
伝えられる。

僧都俊寛は鬼界ヶ島へ流された。丹波少将成経、平判官康
頼も同罪であった。

ところが翌治承二年、高倉帝の中宮として入内した娘の徳
子が懐妊すると、清盛は安産祈願のため流罪を許す使者を遠
く鬼界ヶ島に送った。

依三「中宮御産御祈禱」。被レ行「非常大赦」之内、薩摩方疏
黄島流人丹波少将成経。並平判官康頼法師。可ニ帰洛」之

由。御氣色所候也。仍執達如件

七月三日

赦免状だが、そこには僧都俊寛の名はなかった。

絶海の孤島にただ一人置き去りにされた俊寛が、天を仰ぎ地に臥し、首を叩き、胸をむしり、全身から血ばんだ汗を噴出させ、絶叫して苛酷な仕打ちを呪う姿は、この国のさまたまなドラマやオペラで演ぜられてきたものである。

自分が可愛がり、立身出世させた俊寛僧都だ。飼犬に手を咬まれたにひとしい。清盛は許せなかった。

俊寛ひとりを孤島に置き去りにすることは、あらかじめ計算した残酷な体罰だったのであろう。

一一

生仏は、六波羅屋敷に滞在する日がかさなるにつれて、とまどうのである。それは平氏全体へ寄せる憎悪と、重衡夫妻へいなく感情の矛盾だった。

鹿ヶ谷事件の酸鼻な結末を知るにつけ生仏は平相国清盛を呪った。何という男だ。あの手この手と残酷の限りをつくしている。

その残酷を許すばかりか支持しているとさえみえる平家一門。この集団はいったい何ものなのか。武士の世界には絶体

的な服従があるばかりで、人間の理性もあたたかい血もかよってはいないのであろうか。

ところがその個人——とりわけ明け暮れ身邊に感ずる重衡夫妻はどうだったか。生仏がこれまでに触れたことのない優さしい、素直な心の持ち主だった。

例えば重衡は、大納言成親の死を聞いたとき、声をあげて号泣した。

「今日は音曲をやめよう。大納言どののためにおぬしも一緒に念仏を誦してくれ」

終日ひきこもり、成親の冥福を祈るのであった。

重衡以上に妻の小宰相は心あたたかい女性だ。彼女は実父の五条大納言邦綱を動かして最近、ある計画を実現しようとしている。

「六つのお地藏堂を各地に作ろうと思っています。その名も『めぐり地藏』とつけたんです」

「めぐり地藏ですか。誰の供養のためにですか」

打ち明けられた生仏は盲目の眼を小宰相にむけた。

「西光さまのためにですわ。この屋敷で無残な死に方をされた西光さまのため」

「西光さまの……」

それだけの気持があったのなら、なぜあの日、彼らは清盛

の荒れ狂った手を押さえようとはしないのだろうか。

すでに六個の地藏尊を安置する場所も選定し終ったという。

四宮河原。木幡の里。造り道。西七条。蓮台野。みそろ池のほとり。

まっ先に西七条の辻に地藏堂が完成した。

その日、生仏は小宰相のともをして開眼式に列した。彼自身、式後に琵琶を一曲弾ずることになっていた。

西七条の路傍、この間までは都人がゴミを捨てていた一角が綺麗に片づけられ、瀟洒なお堂が木の香もさわやかに建立された。周囲には数本の松も移植された。

スポンサーだった大納言邦綱は顔を見せなかったが、その御家人や重衡配下の武士たちが集った。

「お導師は？」

表白文を読みあげる僧の声に耳を傾けながら生仏は、そつと重衡夫人に訊いた。

「源空上人ですよ」

「源空上人？」

「このお地藏供養は私からも申上げたのですが、父が建立に踏み切ったのは、あの源空上人の強くおすすめたからです」

「たしか源空上人は、西山で遊蓮房円照さまとご修法中の身とか」

小宰相は、遊蓮房円照がどんな人間であるか、知っていない様子であった。

円照が現在法然と一緒に棲んでいる房舎は西光が建立したものだ。法然房源空が、というよりも今度の六地藏建立には円照の意志が強く働いている、と生仏は判断することができた。

ひとわたり開眼式が終ったあと、導師の源空上人は参列者を前に、もの静かな声で説法をはじめた。

無常な世のさま、哀れな人の心のうつろいを、諄々と語り説くのであった。

最後の言葉が、強く生仏の胸をゆさぶった。

「われわれは、この無常な世を生きたために、全く無力なのです。いかなる調法も祈禱もこれを修伏することはできません。修伏しようなどと考えるはいけません。ただおすがりするだけです。阿弥陀仏のお慈悲におすがりするだけなのです。その御名をと覚えて」

そして源空自身、このあとも静かな声で、念仏を十たび、となえるのであった。

参列した者は、全く自然に唱和していた。

生仏は説法を終えた法然の前に名乗り出ぬわけにはいかなかった。

「私は姉小路の邸で西光さまのお世話になっていた資時と申す者です。ひところししばしば遊蓮房円照さまとお会いしたことがあるのですが、円照さまは今日お見えになっておられませんか」

「ああ、遊蓮房とごじつ懇だっただんですか」

「どうかなされましたか」

法然はそこで悲しい表情を結んだ。

「身体が悪いのです。ここ一カ月来、ずーっと寝たきりなのです」

「それはそれは。一度お見舞いに参上したいと思います」

「いつなりと西山へおいで下さい」

法然との会話は、ここで中断された。生仏は琵琶を弾じなければならなかった。

生仏が美しい声で地蔵和讃を琵琶に乗せて歌っているとき、法然のかたわらには、一人の体軀逞ましい武士が坐りこんでいた。とつとつと何やら質問をかさねていた。

この武士は関東からやってきて、北面に仕える甘糟太郎という男であった。

もちろん法然とは、今日が初対面である。さっきの説法に

ひかれ、人生の悩みを法然に打ち明けているのである。

明快な答えを、法然はこの関東武者に与えた。

いっそう明快な答えが、これより一年後の治承二年十月、甘糟太郎は法然からもらうことになる。

比叡山の学衆と堂衆が血みどろな闘いをくりかえした。圧倒された学衆は朝廷に援軍を頼んだ。たしかに堂衆は横車を押して学衆を攻め立てているのだ。北面の武士が動員された。甘糟太郎は、その一軍の隊長であった。

彼は出陣前の寸暇をさいて東山の大谷へ走った。法然と会った。そのころ法然は西谷広谷を去って、此処に移り住んでいたのである。

「私はこれから人殺しに出かけねばなりません。人殺しは、人間として許されない行為です。しかし戦場に出て、武器を手になければ殺されるばかりです。相手に殺人行為を許すことになります。いったい私は、どう振舞ったらよいのでしょうか」

ぎりぎりの懊悩を法然に訴えたのである。

「殺人はたしかに悪徳です。しかしわれわれ人間が殺しをおかすのは戦場ばかりではない。こうして今、生きていること自体が「殺し」によってささえられています。それでしよう。私たちは魚獣を殺してその肉を食べている。米や植物の

＜勇戦の甘糟＞



生命を絶って生きているのです。いかに精進潔斎をばげんでも、われわれは「殺し」と無縁でいるわけにはまいりません」

「殺しとは無縁で、いられない……」

「そうです。それが生きるということです。だからあなたも戦場で生きねばならない。生きて闘わねばならない。ただし闘いながらお念仏を唱えなさい。念仏を唱える者だけが救われるからです」

「念仏を唱えながら、人殺しをするのですか」

「念仏を唱えながら、魚肉を食べるのと同じことなのです」

「わかりました。ようくわかりました」

甘糟太郎は表情に喜色をうかべた。法然の前に深々と頭をさげると、大谷の房舎を走り出ていった。

翌日、甘糟太郎は近江坂本、八王子山の裾で勇戦奮闘した。おびただしい敵を斬りたおした。だが戦局は官軍に利なく、甘糟隊は敵の包囲におち入った。

傷ついた彼は念仏を唱え続けた。三百遍ほど誦し終ったとき絶息したのを、侍者は確認した。

生きるということ自体が持っている矛盾。これを解決するために人間の力が全く無力であることを法然は生前最後の甘糟太郎に示したのであった。

人間を超えた絶体者の慈悲にすがるときか方法はあり得ない。人間の自力が、いかに卑小なものであったか。

甘糟太郎は、法然のみちびきで明快な死生観を与えられたのである。

三

生仏が遙々西山の広谷へ出かけたのは、西七条の地藏開眼式から数日すぎた日であった。重衡夫妻は、この他出をころよく許してくれたばかりか、二人の童子を道中の案内者として付けてくれた。

そればかりか、

「わしらにかわって、しっかり源空上人の説法を聞いてきて欲しい。戻っておぬしの口からそれを聞きたい」

重衡は真剣な眼差しで頼みこんだ。

六波羅屋敷から長い道のりをたどり、西山広谷の房舎に到着したとき、生仏はその内部にただならぬ気配がただよっているのを感じた。

座敷の中央に仰臥する遊蓮房円照の枕もとには法然房源空が端坐し、周囲には法然の弟子たちが心配そうな表情で病人の顔を覗きこんでいた。

すでに円照の顔には生色がなかった。眼は閉じられ、わず

かに胸を上下に盛りあげて弱々しい呼吸を刻んでいた。

「寶時入道ですね。こちらに坐りなさい」

と、法然は静かに言った。

「円照さまは？」

「うむ。お迎えも間近かでしょう」

「御病氣は？」

「以前の勞咳です」

「このまま息が絶えてゆくのでしょうか」

「いや」

と、法然はきっぱりと首を振った。

「再起なさいますか」

「それはわかりません。しかしこの昏睡からは必ずもう一度さめます」

「なぜ？」

「円照どのは、まだ最後の念仏を唱えていないからです」

「……」

「念仏修法に励んできた円照どのが、それをやらぬ道理はありません。彼は立派な念仏者なのです」

法然の言葉には確信に満ちていた。

しかもこの確信は、じきに実現した。昏睡状態だった遊蓮房円照の顔面に動きが見えた。口もとが動き、そして眼がう

つすらと開かれた。

その眼はゆっくりと生仏に向けられてきた。

「ああ、資時どの」

と弱々しい声で呼びかけた。

「おわかりですか。円照さま」

「西光法師もあのような運命で……資時どの、それにしても不思議なことだ」

「……」

「多分わしの命数もじきに尽きるであろう。しかしまだ息がある。息が、だけではない。ちゃんとこの眼は見えている。

おぬしの身体はどこも悪くない。しかし眼は相変らず見えない。そうだな」

「はい、見えませぬ」

「今以て、わしはおぬしの盲目をあわれんでいる。残り少いこの瞬間にでもだ」

「私はあなたの生命が刻々に消えてゆくさまをあわれんでいる。人間はつねにお互いにあわれみ合うのでしょね」

「……」

円照は話し疲れたか、そこで黙りこんだ。眼を閉じた。

胸の盛り上がりもいっそうか弱いものになった。

生仏にはこのまま消滅してしまうのではないか、と思われ

た。

弱々しく咳こんだ。咳が切れないようである。

最後の力をしばって円照は咽喉にからんだ痰を吐いた。法然は袖でそれをぬぐってやった。法然の袖に淡い血のにじんだ痰がこびりついた。

「源空どの。いよいよ見えてきた」

「見えてきましたか」

「阿弥陀さまがお迎えにこられた」

「そうでしょう。円照どの。立派な念仏者のあなたに來迎の阿弥陀さまが見えぬ道理はない。さあご一緒に念仏を」

「はい」

円照は一語一語はつきりと念仏を唱えはじめた。一座の者もそれに唱和した。

九回まで、くりかえされた。しかし十念目を唱えぬまま、絶息した。

いや、絶息したかに見えたのである。

「円照どの、円照どの」

法然は強い声で呼びさまそうとした。

絶息したはずの口もとが、やがてかすかに動いた。声が洩れて出た。

「南無阿弥陀仏」

「ああ……」

十念目を確認した途端、法然の両眼からは大粒な涙がこぼれ落ちた。

「見事なご往生……いや奇瑞奇蹟なぞ何一つおこらなんだ。日常に唱えつづけた念仏を、そのまま静かに……」

と、法然はこの念仏者の命終を心から祝福するのであった。

自分が人間として生まれて幸福だったことは、二つのありたいことにめぐり遇えたからだ、と法然は後年になって述懐している。

それは、一つに浄土の教えを知ったこと。二つに遊蓮房円照にめぐり遇えたことなのである。

信西入道のおびたらしい子息の中で、学殖識見拔群、天下第一の秀才とうたわれた信濃守是憲は、結局は政官界へ進むことなく、見事な念仏ひじりとして生涯を閉じた。まだ三十七歳であった。

亡きからは房舎の裏山に埋葬された。そこは、あの日門照自身が涙ながらに埋めた愛人貴子のすぐかたわらであった。

「源空さま」

と、埋葬が終わったとき、生仏はひらかぬ眼に、その臉に強い決意の色を浮かべた。

「何だな」

「お願いがございます。私をお弟子の列にお加え下さい」

「弟子の列に——」

「はい、出家は致しましたが、それは形式だけで未だ心の師匠を一度も持ったことがないのです」

「心の師をか」

「源空さま、あなた以外にその師はいないと信じました」

「心の師は、現前した姿ではどこにもいないよ」

「……」

「私は誰の師でもなく、またあなたは誰の弟子でもない」

「かないませぬか」

「かない、かなわぬではない。あちこちの寺で申すような師弟関係は、あり得ないと言っているだけだ」

「……」

生仏には法然の言う意味がよく理解できなかった。

「よろしいか。阿弥陀仏のお慈悲を信じ、念仏を唱える者、そのすべてが師であり弟子である。それだけのことだ。私の弟子になりたいのなら、たった今から念仏を唱えることだ。念仏者になることだ」

法然の声は、とりわけ敏感な生仏の耳へ喰い入るように響いてきた。

(つつく)

二 編集後記 二

○早春の息吹にいざなわれ、弱々しく顔を出した木々の芽は、頃々ともなると力強く変貌し、私たちを圧倒する。当り前のことながら、この自然の力には驚嘆するばかりだ。しかし、人為的な力（というよりは暴力）で例年以上に問題となっているのが、暴走族と称されている若者の集団だ。若さの特権とばかりに、暴行、傷害、器物破損、はては殺人にまでエスカレートする仕末。警察当局も厳罰主義で取締りを強化するということであるが、一般人もただ傍観するだけでは収まらない、深刻な社会問題となってきたことは事実であろう。

○若者の話題をもう一つ。「リリー・マルレーン」という歌が、今若者を虜にしている。この歌は三十余年前、第二次大戦が急をつげたヨーロッパ各地の戦場で、兵舎の向こうにとるる街の灯、その下でまた君

と逢おう、リリー・マルレーン……と、恋人リリーと別れた切なさを甘いメロディにのせ愛唱された歌で、連合国側といわずドイツ側といわず、前線将兵には敵味方なく聴かれ、歌われたものだ。この歌が、今深夜放送を中心に、また「リリー・マルレーン」を聴いたことがありますか」（鈴木明著・文芸春秋社刊）という本にまでなり、日本の若者を魅了している。このリバイバルヒットの原因はいろいろ考えられているようだが、高度成長期を目指す日本の現状を、虚構なる繁栄と見る、シラケた時代に育った若者が贈る、繁栄日本の葬送曲ととられているようだ。これまた考えさせられる問題であろう。

○明るいニュースを。寺内大吉先生は先ごろアフリカ各地を訪問、殊にナイルの船旅は格別だった由。本誌の画家陣久住静雄・松濤達文両先生は、相前後して銀座にて展覧会を開催。共に盛会に終了とのこと。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 七月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年六月二十五日 印刷

昭和五十年七月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

「浄土」教化トラクト

『おぼん』

新書判・表紙共12頁

定価一部18円(200部以上16円)

送料・実費

『ひがん会』

秋季号 B6判 8頁

価20円(200部以上18円)

送料・実費

文部省出版助成図書

徳本行者全集 全五巻 第一巻 発売

定価 8500円(送料共) 第一巻 A5判 530ページ

近世浄土宗史において庶民に対して絶大なる教化力をもった徳本行者の全生涯、勸化聞書、請待日記、和歌等を網羅。研究の資料に教化の参考には是非この全集をおそなえ下さい。

特価期間 昭和50年8月中 特価 7500円(送料共)

発行所 山喜房仏書林(東京大学赤門前)

申込所 170 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学内 浄土学研究室

振替(東京) 151610 番

新刊『よい子のつどい指導者の手引き』

桑原法道・高杉治子編集

B6判・44ページ

定価 200円(送料共)

寺院における子どもの合宿案内の見本、キャンプ(テントのはり方)、帰郷式、ゲーム、ソング、食事の献立、結索法、キャンプファイヤー、日程表、キャンドルサービス、水泳の心得等実践的に日をおって説明。山口教区が10年以上にわたって実施してきている夏休み「よい子の集い」の経験をもとに作成。参考資料としてご活用下さい。

発行・申込所

〒740 岩国市今津町6-12-5 称光寺内

山口教区教職員協議会